

ビジャ・エルサルバドルにおける 女性組織と教会

——貧困と闘う救世主の町——

原 田 金一郎

I はじめに

ペルーのビジャ・エルサルバドル市は、1971年スラムとして発足した。1984年市に制定され、「自立したスラム」といわれているが、いまだ「貧困都市」である。したがって、ここで取り上げる女性組織や教会やNGOが貧困と闘い、さまざまな活動を繰り広げている。

1983年創設されたビジャ・エルサルバドル民衆女性同盟 (Federación Popular de Mujeres de Villa El Salvador, FEPOMVES、以下では女性同盟と略称する) は、12歳以下の子供に対する粉乳の配給を行うミルク配給委員会 (Vaso de Leche)、炊事をできない家族のための給食活動である民衆食堂 (Comedor Popular) などを通じて、貧困と闘い、女性の解放を目指してきた。ここに取り上げるのは、女性同盟会長のクレオフェ、副会長のベルタ、教育担当書記のマリアの3人である。

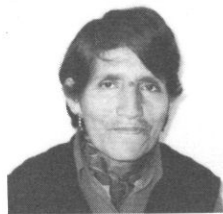
一方教会は、1971年5月のビジャ・エルサルバドル設立の契機となった「土地侵入」の際から、ビジャ・エルサルバドルの民衆とともにあった。教会給食 (Comedor Parroquial)、医療センターなど多彩な活動を行っている。ここではカトリック教会の活動を取り上げることにする。第3教区教会の管理長のア

ントニオと、僧ジョンの2人である。

II クレオフェ・キスベ・コンチャ（女性同盟会長、50歳）

[質問——女性同盟とは何か？]

——社会的な基礎的女性の組織。女性の開発を目指している。50人の代表が働いている。国は危機にある。働く市民を創造する必要がある。マリアエレナ・モヤノは、ミルク配給委員会や民衆食堂を創造した。その枠組みを継承している。また、マイクロ企業の創造も行っている。女性による企業だ。具体的な活動としては、生産（レタス栽培）、教育（研修）、経済などがある。連帯銀行（Banco Solidario）を融資に利用している。アンステルビ（オランダ）も融資している。クリニックを経営している。女性のための女性組織を目指している。また、博物館も経営している。女性のための研修やリーダーシップ養成も行っている。NGOが技術的支援を行っている。



[質問——マリアエレナ・モヤノの本を日本で出版する計画があるがどう思うか？]

——『ひとつの希望を求めて』は完全な本で、いいことだ。ディアナ・ミロスラビッチはよく編集している。マリアエレナの友人で、彼女をよく知っている。

[質問——参加的民主主義についてどう思うか？]

——市民に参加を促すもの。参加型予算は市民の訓練である。

[質問——助役は「コミュニンの復活」を述べているが、これについてどう思うか？]

——市当局による統治は70年代とは異なる。CUAVESとは目的が異なる。各組織がそれぞれの機能を持っている。

[質問——女性同盟の創設はいつか？]

——1983年創設した。現在組合員は800人だが、活動にはシンパサイザーが1000

～2000人参加する。

[質問——この建物は市のものか?]

——女性同盟固有のものだ。他にも5つほど持っていて、民衆食堂センターや研修センターとして用いている。

Ⅲ ベルタ・ハウレギン・フェルナンデス（副会長、50歳）

[質問——女性同盟の活動とは何か?]

——（1）生産活動、政府の支援を受けている。レタス栽培が主。

（2）連帯、女性による参加、他国からの支援を受けている。

（3）保健、女性と子供のためのクリニックを経営。

[質問——ミルク配給委員会はどうなったのか?]

——2002年市当局に移行した。着手時にはわれわれがやった。現在は部分的にやっている。

[質問——民衆食堂はどうか?]

——フジモリ時代が問題だった。現在は女性同盟としてやっているが、参加と融資が問題だ。

[質問——マリアエレナ・モヤノについてはどうか?]

——彼女の暗殺により組織が影響を受けた。現在は多くの女性があとに続いている。当初は政治が理解できなかったが、今では参加するようになった。私はマリアエレナ・モヤノと一緒に働いた。多くを理解した。女性は能力を持っているということを多くの女性に学んで欲しい。

——現在会員は800人だ。ミルク配給委員会は12万世帯に配布していた。

——現在は連帯銀行が融資している。レタスの販売を資金源にしている。

——1983年にさまざまな組織の女性が参加して女性同盟が設立された。そして、



地域統合開発計画のもとで活動した。

[質問—CUAVES との関係は?]

—主に男性がやっていた。私たちは住民として参加した。

[質問—組織構成はどうなっているのか?]

—会長、副会長、7人の書記（組織、通信・プロパガンダ、教育、社会支援、経済、監督、議事録）からなっている。2年ごとに選挙で選出される。

[質問—市当局との関係は?]

—ミCHEL・アスクエタ時代は密接だった。ミルク配給委員会に関してもそうだった。現在のハイメ・セア市長とは冷たい関係にある。

—夫の無理解が参加を難しくさせている。私も5年前に離婚して自由になって参加できるようになった。

IV マリア・チャベス（教育担当書記、41歳）

[質問—仕事は何をしているか?]

—研修プログラムを担当している、40~50人が参加している。また、CEO（職業教育センター、30~70人参加）もやっている。工業、服飾などを研修する。

—また、創造的スポーツも行っている。

[質問—いつ入会したか?]

—入会は古い。2003年4月教育担当書記となった。

[質問—ミルク配給委員会について]

—2002年まで地区責任者だった。同年12月にやめた。

—教区教会民衆食堂もやったが、7、8年まえにやめた。

[質問—女性同盟の目的は何か?]

—働く女性の政治的経済的支援の活動を行っている。また、教育も行っている。

[質問—マリアエレナ・モヤノを知っているか?]



——彼女が会長の時、基礎委員会をやっていた。直接知ってはいない。

[質問——どんな女性だったか?]

——規律を守って死んだ。威厳のある人だった。

[質問——女性同盟の現状について]

——政治の欠如から困難に陥っている。必要性が異なってきたからだ。以前は、電気・水という共通の必要性があった。

[質問——市当局との関係は?]

——最小の協調関係だ。

V アンтониオ・パロミノ・キスペ (教会管理長、44歳)

[質問——教会は貧困に対し何をしているか?]

——カトリック教会は社会問題を扱っている。この第3地区の教区教会はコメドール [給食] 活動もやっている。コメドール・ポブラルとの違いは、食事以外に女性の開発を考えていることだ。連帯、家族のことを考えている。



——また医療センターも営んでいる。そこでは医療のみならず、社会的療養を受ける。保健の研修も行う。

——老人の面倒を見ている。遺棄された老人たち、145人の世話をしている。その9割は地方出身者で、政治暴力から逃げてきた人たちだ。

——他のプログラムは人間としての尊厳のためのもので、研修、セミナーなど人権全体にわたっている。青少年、子供、成人のためのプログラムもある。この教会のみならず、他の地区の教会でも同じことをしている。国家のサービスにアクセスを持たない人々の面倒を見ている。

——1971年ビジャ・エルサルバドルの設立にさいし、教会は重要な役割を果たした。

——キリスト教基礎共同体が重要な役割を果たしている。

[質問——現在抱えている最大の問題は何か?]

——それは貧困だ。とりわけ失業が大きな問題だ。青少年問題としても大きい。その結果、売春、泥棒などが見られる。

[質問——融資源はどこから来ているのか?]

——ドイツのある教会から融資を受けている。当教会自身の融資源もある。人間の尊厳プログラムにはアムステルダムからの援助がある。スペインの教会からも援助を受けている。

[質問——研修の規模はどれくらいか?]

——子供の研修が1年のコースで約400人、青少年のプログラムに参加しているのが600人、成人のコースが600人である。

[質問——ビジャ・エルサルバドルの経験は「解放の神学」と関係があるか?]

——「解放の神学」には大いに学んだ。より貧しい人に救いの手をさしのべることだ。「解放の神学」はビジャ・エルサルバドルに大きな足跡を残した。グスタボ・グティエレス神父はしばしばここにやってくる。1983年から85年まで15日間の神学コースを開き、毎年500人が参加した。カトリックの思想はビジャ・エルサルバドルの民衆を考えている。

[質問——キリスト教共同体とは何か?]

——集団で個人がどう行動するかを学ぶ。共有と連帯を学ぶ。

[質問——この教会はいつできたのか?]

——この教区教会 (Centro Parroquial de Oscar Romero) は、1986年設立された。暗殺されたエルサルバドルの司教の名をつけている。共同体への奉仕のためにいつも開かれている。

[あなたの職は何か?]

——管理長 (Coordinador General de Programa de los Martincitos) である。

[質問——どこ出身か?]

——1960年アレキパの農村共同体で生まれた。町までは8時間歩かねばならない辺境で、1973年にビジャ・エルサルバドルに来て中学校に入った。フエ・イ・アレグリア校ではミッチェル・アスクエタ (元市長) に学んだ。

[質問——ビジャ・エルサルバドルの未来についてどう思うか?]

——ビジャ・エルサルバドルは組織されており、計画的でもある。住民は活動的で参加的だ。今後5～10年後目覚しく発展するだろう。工業団地に加え、将来は大学、総合病院などが設立されるだろう。以前は、政治的暴力、センデロ・ルミノソなどの問題があった。近年は急速に発展している市である。

VI ジョン・オレアリー（アイルランド人僧侶、59歳）

[質問——教会は貧困とどう闘っているか?]

——ビジャ・エルサルバドルの教会は医療に力を注いでいる。全教区に医療センターをもっている。よい医療サービスを最小の費用で与えている。老人センターもある。現在当教区教会には150人の老人がおり、月・水・金曜に朝食と昼食を提供している。子供のための学校朝食もパチャカマックで行っている。また、女性のためのセミナーもある。第9地区では3つの女性グループがカードを作る“マイクロ企業”を営んでいる。しかし、医療が一番重要だ。第1地区では15名の医師が働いている。第2地区では、眼科医、歯科医、ソーシャルワーカー、技師などがいる。第6地区では精神衛生に特化している。医師たちは統合的集中力を備えている。



[質問——貧困に対する対策はどう変わったか?]

——99年以前は給食（コメドール）に集中していた。現在は医療だ。われわれは教会の中のみで生きるのではない。そして、キリスト教信徒としての教育を行っている。

——教区者に限らず極貧者を受け入れる。かつては、テロリズムからの逃避民がいた。市内には3つの教会があり、十分の一税で極貧者を助けている。この第3地区には3つの共同体があり、2つのセンター（教区教会、医療センター）があり、月に一度集まり、社会的事例について話す。

[質問——医療は無料か?]

——ちがうが、払えない者は無料だ。無料にしたら、医療の価値が失われる。

寄付により料金は安い。

[質問——給食から医療に活動が変わったのはなぜか?]

——フジモリ時代、給食に援助が出るようになった。教会は給食を続ける必要がなくなった。現在コメドル・ヘネラルを開く用意をしている。というのも1.5 ソル [45円] の食費も払えない人がいるからだ。

——かつて、フエ・イ・アレグリア校で給食を始めた。問題は責任者だ。1日100人を世話した。それ以上はできない。現在は教会内にある。以前は外にあり、女性たちが働いていた。

——CARITAS (世界的キリスト教組織) が、山岳地帯 (シエラ) や熱帯雨林地帯 (セルバ) の教会が苦境にあるので援助している。

[質問——医療センターは女性を扱っているか?]

——子供を主として扱っているが、産婦人科を持っている。

[質問——いつビジャ・エルサルバドルに来たか?]

——1992年にアイルランドから来た。以前、1971-76年シエラのポリマックにいたことがある。

——医療はきわめて重要だ。リマは医療はいい。ここでは危機的状況にあり、貧者が医者に群がっている。

[質問——グスタボ・グティエレスを知っているか?]

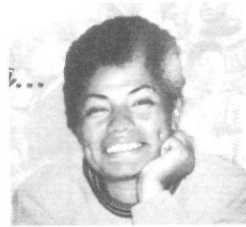
——もちろん、よく話しに来る。毎年2週間の夜間学習会を開く。新聞ではわからない経済・政治についてしゃべる。

——かつて1971年パンプローナでの土地侵入で一人が死んだ。そこに4人の僧侶がいた。教会は人々とともにある。第2地区では、僧エウヘニオが電気・水・下水のために人々とともに闘った。「解放の神学」は、われわれに大きな影響を与えた。先ほどの学習会でも人間の形成のために学習している。人々は自分自身を形成しているのだ。

Ⅶ むすびにかえて——マリアエレナ・モヤノと解放の神学

(1) マリアエレナ・モヤノと女性同盟

1983年12月マドリー映画館で女性同盟の第1回大会が開かれた。マリアエレナは息子連れて参加した。そして女性同盟の活動家となり、1986年と1988年会長を務めた。1989年女性同盟から立候補し、ビジャ・エルサルバドル市助役となる。1992年2月15日センデロ・ルミノソにより虐殺される。遺体にはダイナマイトが括り付けられ木っ端微塵にされ、文字通り地上から抹殺された。なぜセンデロがかくもマリアエレナを憎んだかといえば、センデロが革命集団などではなく、テロリスト暴力集団であることを見抜き、反暴力キャンペーンの先頭にマリアエレナが立ったからである。1958年11月生まれのマリアエレナはその33年の短い生涯を閉じた。しかし、今もなおマリアエレナは女性同盟のシンボルであり続けており、ディアナ・ミロスラヴィッチ編集の遺稿集『ひとつの希望を求めて』も出版されており、われわれはマリアエレナの思想と人となりを知ることができるのである。



マリアエレナはいう。女性同盟の目的は、「女性の役割を再評価し、能力を高め、地位を高め、自尊心を高める」(Moyano 1993. 訳文は日本語版訳者である山中忍氏による粗訳稿を用いる。P.6) ことです。「また、私たちの地域社会の問題や私たちが苦しむ貧困の理由をより明確に理解する」(同上) ことです。女性同盟のおかげで、「私的な空間である家庭から飛び出し地域社会で活躍する女性の比率が高くなり、今日ビジャ・エルサルバドルには数千人の女性活動家があります」(同上)。つまり女性は家庭という狭い空間に閉じ込められている。このような状況をマリアエレナは、「女性の周縁化」(p.14) と呼んでいる。

また粉乳配給運動であるバソ・デ・レチェについてこう語っている。「女性同盟にとってバソ・デ・レチェは、組織、自主管理および自己評価のひとつの経験であった。女性たちは独力で自らの問題を解決し、自分たちが指導者であ

り、その能力があると感じている」(p.8)。

またもうひとつの重要な女性同盟の活動である民衆食堂(コメドール・ポプラル)についてもこう語っている。「私たちが苦しみ続けている飢餓、失業そして貧困の問題を解決するため、そして生き残るために私たちは私たちなりのプランを生みだした。そのひとつがコメドール・ポプラルである」(p.10)。

マリアエレナは女性たちを鼓舞しつづけている。「私たち女性はとても強い。私たちが築いているものを信じている。恐れる必要はない。私たちは人々の福祉、連帯そして正義を求めている」(p.21)。

そして、1970年代のビジャ・エルサルバドルを風靡した自主管理社会主義の影響も見て取れる。「民衆は自主管理することを学ばねばならない、なぜなら貧しい人々がかつて国を統治したことはなく、いつも一人のエリート、エリート化した政治階級が存在した。私たちはいつの日か民衆自身が国レベルで統治する能力を身につけられるように小さなことから自主管理を学ぶべきであると信じている」(p.9)。

マリアエレナは宣言している。私たちは「権利を要求する、施しはいらぬ」(p.12)。そして最後に、彼女なりの社会変革の展望を述べている。「革命とは、人生、個人および集団の尊厳を肯定することであり、新たな倫理です。革命は死でも、強制でも、服従でも、狂信でもない。革命は新しい命であり、私たちの民衆によって作られた組織とともに内部民主主義を尊重し、新生ペルーの新たな権力の芽を育みつつ、公正で、尊厳に満ちた連帯的な社会をめざし説得し闘うことである。私は、民衆、女性、若者そして子供たちの側に立ち続けるだろう。社会正義に基づく平和を求め戦い続けるだろう」(p.25)。

(2) 解放の神学とラテンアメリカ

インタビュー中に再々出てきた「解放の神学」とは何であろうか。「解放の神学」は最初ペルーのグスタボ・グティエレス神父によって提唱された。そして1968年コロンビアの「メデジン会議では、解放の神学が紹介されたのみならず、ラテンアメリカ自らの神学であると全面的に承認されたのである」(アスティゲタ 2004:184)。

アスティゲタによれば、「解放の神学の新しさや独自性は、論理的なものというより新しい視座、つまり虐げられている人たちの苦難と闘いという観点から、伝統的神学を考察しなおすことにある」（同上：186）。つまり、「この神学が持つ視座や方法論の変化がめざすところは、歴史における人間解放の神学的意味をとらえなおすことである」（同上）。具体的にいえば、「富める国の発展の副産物であるような『発展』ではなく、個人の利益より貧しい国々との連帯を追究する世界共同体の構築、平等な福利の実現、環境破壊の原因となる貪欲な消費の削減をめざし、質素な暮らしながらも人間の生活の豊かさを開花させる『発展』を志向するのである」（同上：192）。

また解放の神学の信徒ベリマンは、次の3点を「解放の神学」の特徴としてあげている。

「1、キリスト教を貧者の苦しみ、闘い、希望という点から解釈するものである。

2、社会やそれを支えるイデオロギーの批判である。

3、貧者という視点からの教会やキリスト教徒の活動にたいする批判である」（ベリマン 1989：p.vii）。

それでは、創始者グティエレスは貧困についてどう語っているのであろうか。「貧しいということは、飢え死にすること、文盲であること、他者から搾取されていること、搾取されているのを知らないこと、自分が一人の人格であることを知らないことである」（グティエレス 1985：288）。さらにいう。「つきつめれば、貧しさの存在は、人間同士の連帯と、神との交わりの両者がともに引き裂かれていることを示している」。「貧しさは、悪、恥ずべき情況であり、それは、現代においては、すさまじい広がり方をみせている。これを根絶するには、他者との一致のうちに、神と正面から対峙する機会を、より密にすることである」（同上：296）。

結論としてこう述べている。「貧しさは、愛と解放の業である。あがないの意味を持っている。人間の搾取と疎外の究極原因が利己心であるなら、自らの意志による貧しさの根本的な原因は隣人愛である。キリスト教的貧しさは、貧しい人、悲惨と不正の情況に苦しむ人々との連帯にかかわっていくこととして

示されてはじめて、意義を有するのである」(同上：303)。

このような「解放の神学」に鼓舞されて、今日もまた解放の神学の信徒たちはビジャ・エルサルバドルで、そしてラテンアメリカで貧困と闘っているのである。

参考文献目録(BIBLIOGRAFIA)

1 Fuentes Primarias (Entrevistas)

- | | |
|-------------------------------|---------|
| Con Cleofé Quispe Concha | 13/8/04 |
| Con Belta Jaureguin Fernandez | 11/8/04 |
| Con María Chavez | 2/9/04 |
| Con Antonio Palomino Quispe | 11/8/04 |
| Con John O' Leary | 19/8/04 |

2 Fuentes Secundarias

- Gutiérrez, Gustavo
2003 Teología de la liberación: Perspectivas, Lima: CEP (11a edición).
Moyano, María Elena
1993 En busca de una esperanza, Lima: Ediciones Flora Tistán.

3 邦語文献目録

- アスティゲタ、ベルナルド
2004 「解放の神学——グスタボ・グティエレスを中心に」今井圭子編著『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社。
グティエレス、グスタボ
1985 『解放の神学』関望・山田経三訳、岩波書店。
ベリマン、フィリップ
1989 『解放の神学とラテンアメリカ』後藤政子訳、同文館。